2011.11.6 西福岡教会説教 中川憲次

説教題 「人生は実る」

聖書箇所 コリントの信徒への手紙一 第 15 章 50 節–58 節

「わたしの愛する兄弟たち、こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの労苦が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです。(58 節)」

本日のテキストの 57 節は、こう言っていました。「わたしたちの主イエス・キリストによってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。」

この言葉は、同じパウロのローマの信徒への手紙 7 章 25 節を思い出させます。パウロ曰く、

「わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。」

なぜそのようにパウロが感謝するかと申しますと、それはパウロが人間の惨めさに気づいていたからではないでしょうか。同じローマの信徒への手紙 7 章の 18 節でパウロはこう言っています。

「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです」そして、22 節から 24 節ではこう言っています。

「『内なる人』としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があって心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか。」

パウロの言う惨めさは、私たちにも思い当たる人生の惨めさでしょう。この惨めな人生については、本日の箇所で言うなら 58 節の「労苦」という言葉がよく表しています。ここで「労苦」と訳された言葉はコポスというギリシャ語です。このコポスというギリシャ語は、コプトーという動詞を元にしてできた名詞です。コプトーという動詞は「打つ」という意味です。「打つ」とは文字通り、鉄を打つとか、畠を打つとかいう意味をあらわします。とにかく、しんどい肉体労働です。だから労苦です。そこから、「胸を打つ」という意味にも発展したようです。そうすると、胸を打つような悲しみに繋がる労苦という意味になるでしょう。黒人奴隷たちの苦しい労働が連想されます。この言葉は英語に直すと labour です。ラテン語の labore から来た言葉です。ラテン語の labore は、修道士の労働 を表すのにベネディクトゥスが使ったので有名です。ベネディクトゥスは自分が創設した 修道院のモットーを ora et labora といたしました。それは「祈れ、そして働け」という意 味の言葉です。この場合の労働とは、まずは農作業であり、橋を架けたりする土木作業な ど、大変な肉体労働が中心でした。それは確かに労苦でした。このような言葉の歴史を辿 るコポスという言葉を本日の箇所でパウロが使っているところに、私は人の人生を見るパ ウロの思いやり深いまなざしを感じます。パウロは、人の苦しみを実感していたのでしょ う。私たちは本日、この教会に連なる故人の写真を前に並べて、このように永眠者記念礼拝を守っています。この永眠者の方々の人生を思い出すとき、私たちはその人生が如何に 労苦に満ちたものであったかを思い出さないでしょうか。この西福岡教会で、ここ二、三 年のうちに天に召された方のことを思いだしてください。私は、この教会で説教させてい ただくようになって日が浅いので、この教会の教会員の中でなくなった方の思い出はあり ません。それで、この二,三年の間に亡くなった人と

言えば、母のことを思い出します。 母は二年前の 4 月 12 日に 88 歳で亡くなりました。母の生涯はまことに労苦に満ちたもの でした。母は小学校 4 年の時にお母さんを失っています。私の祖母に当たりますが、祖母 は結核に罹って隔離されていた小屋に火をつけて焼身自殺をしたのだと言います。私の母 は、自分の母親が小屋の中で火に包まれて焼け死んでゆくのを見たというのです。その後 は母、小学校を 4 年で中退して、弟達の母親代わりになって働き通したといいます。成人 して復員してきた兵隊と結婚して姉と私が生まれたのですが、姉は一年も経たないうちに 死んだそうです。そして私の父も死に、母は 30 代半ばで寡婦となり、私と妹を生活保護 を受けながら育ててくれました。私の母のことはこれぐらいにしておきましょう。本日、 この後でこの教会に関係した故人の方々のお名前を読み上げさせていただき、その方々の 地上の日々に思いを馳せたいと思いますが、その方々の労苦は、この地上で充分に報いら れたでしょうか。それは、あるいは充分とは思えないかもしれません。まるで労苦するだ けのためにこのように生まれてきたと思えるような方おられるかもしれません。実は、私 は私の母のことを思うと、そのように思えてならないのです。しかし、正に本日のテキス トのコリントの信徒への手紙一 第 15 章 50 節から 55 節までは、これら全ての故人に充 分な報酬が与えられると宣言しています。それは「復活」という報酬です。そして、パウ ロのこの言葉は、今ここに生きている私たちにも、復活という人生の実りを約束してくれ ています。私たち全員の人生は、間違いなく復活という実りに達するのです。そういう意 味で、クリスチャンの人生は実ります。

私は、この教会にかかわられた方々の中でこれまでにお亡くなりになった方々のことを思う時、第二次世界大戦以後の日本人の実りをも思わされます。あのぼろぼろだった状態から、その方々の中の少なからざる方々は立ち上がり、労苦の日々を生き抜かれました。その労苦は、そのお子さん、お孫さん、そしてひ孫さんへと実ってまいりました。今この場に、その方々かかわる方々が集っておられるのを見ると、そのような意味でも、なくなられた方々の人生は充分に実っていると思わされます。しかし、よしんばそのような実りが見えなくても、パウロは本当の実りを教えてくれていたのです。それが、繰り返しになりますが、復活という実りです。この復活という実りを思えばこそ、私たちは亡くなられた方々と平安のうちに向かい合うことができます。また、この場の私たち自身も、日々の労苦を希望をもって担うことができます。

最後に、もう一度、強調しておきます。「主に結ばれているならば自分たちの労苦が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っているはずです」と言われた際の、私たちが「知っているはず」のこととは、人生は復活へと実り行くということに他なりません。クリスチャンにとって何が幸いと言って、イエス・キリストが身をもって示してくださった「復活の恵み」を知る以上の幸いはございません。

祈り 神様、本日この永眠者記念礼拝において、故人と共に復活の恵みに思いをはせることができまして感謝致します。この祈り、我らの主イエス・キリストの御名によって御前におささげ致します。アーメン。